

シノホホだより

—— 友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌 ——



vol. 47
2023 冬号



すずき出版発行「心のうたかれんだあ」(平成7年版)より 詩／坂村真民「信仰」 画／海野阿育

坂村家のアルバム

vol.17

お見合い相手は橋を渡った先の村に



結婚当初の真民と久代

掲載の詩は、私(真民三女)の父と母が初めて会った日から16年後、ざぼんの砂糖漬を貰って、その時のことを思い出し、その日の喜びがよみがえって出来たものです。写真は朝鮮にて、結婚後間もない二人が写っています。まるでプロマイドのよう…。

昭和9年朝鮮に渡った真民に、母親から結婚の話がもたらされました。父は、こう答えたそうです。「私が生まれた村から選んで下さい」と。タ子(母)さんは、村中を尋ねて回りましたが見つかりません。次に、父はこう頼みました。「それでは、近隣の村から選んで下さい」。そうして、菊

池川を橋一つ渡った月瀬村青木に、タ子さんはやっと一人の女性を探し当てたのです。

ここで、父の結婚観のようなものを少し書き出してみましよう。自費出版随筆集「あかねの雲流るるとき」に収録の『妻とザボン』の中で、次のように書いています。―神がわたしにどんな女性を与え給うであろうかということは、ながいあいだの夢であり、願いであり、幻であった。―と。また坂村真民全詩集第四巻「願い」という詩の一節に「わたしのような者にでも／どうかきてくれるひとがあってくれ／そう二十代のわたしは願った」とあります。家柄や器量などはまったく念頭にありませんね。年少にして冷たい世間を知る身となり、その中で唯一楽しい少年時代を過ごした思い出の土地の女性、ただそれだけだったのです。

さて、母親が探し出した女性は真民より八年下で、その年の春、高瀬高等女学校専攻科を卒業したばかりでした。両親は早くに亡くなったおり、長兄のもとで学校に通い、その兄の仕事の關係で鹿児島に住んでいるとの事。そこではるばると朝鮮から鹿児島までの見合いの旅となりました。山を越え、海を渡り、船に乗り、汽

表紙の詩



信仰 (71歳)
 泥が
 光る
 罪が
 輝く
 それが
 人の
 信仰だ

この詩は、真民が71歳の時の詩です。

真民の詩には「信仰」を題材にした詩が多数あります。この詩が掲載された「詩国第19巻2月号」には、

「信仰」	「詩と信仰」
信仰に深淺はない	信仰によって
素直で明るく	詩を深めようと思ってきたが
楽しいものでありたい	今はもうそれも思わなくなった
	平凡でいい
	すべての人に豊かな心で接し
	一木一草に暖かな心で接し
	愛の眼(まなこ)を失わず
	生きてゆけたら
	それでいいと思うようになった

という詩が同時に掲載されています。

真民は宗教というものを考える時、「信仰」が一番大切なものと考えていました。それも、「愚かな心になって信じる」ことが大事だと言っています。

私の理解では、坂村真民は突き詰めて言えば、仏教もキリスト教もイスラム教も、その根本にあるものは同じであり、宗教の壁を越えた「全ての宗教の根本にあるもの」を信ずることが、「信仰」だと言っています。この考えに立たなければ、宗教戦争は無くならないのかもしれない。

ざぼん

妻よおまえと初めて会った日
 そしておまえを貰うことにきめた日
 母とわたしはその喜びで有頂天になり
 町じゅうのざぼんを買いしめでもしたように
 両手に持ち肩にかけ首にさげ
 南の町を去ったのだった

(後略)

車に乗りして、まだ見ぬ人の面影を描きながら不安と希望を抱いて、夕暮れが迫る中、母と共に鹿兒島に降り立ったのです。ここで、掲載の詩に戻ってみましょう。お見合いが上手く行ったことが、直ぐにわかりますね。思っていた以上に、と言う事もありありと伝わって来ます。再度、先程紹介した随筆集の一文をかります。嬉しさが、夫なきあと一人で子供たちを育ててきた母に、一時にあふれてきたのであろう。抑えることのできないよろこびの言葉が門を出て二人になった親子の間にとりかわされた。急に賑やかな通りの駅前に出た二人は、それ

らの渦のような光までが、わたしたちを祝福してくれているように思えてならなかった。突然、母親はつかつかと果物店にはいって行って——この先が、詩に詠まれていきます。随筆集からの引用を多く載せましたのは、父の筆致から、その喜びの大きさを皆さんにも感じ取っていただきたいからです。翌年(昭和10年)3月に熊本にて結婚式を挙げ、二人は朝鮮へと海を渡りました。この見合いのお相手は辛島久代、次回春号にて詳しく紹介致しましょう。

文／西澤真美子

「真民さんのねがい(願う)」展

ミニ解説

今回の企画展では、真民の「ねがい(願う)」の詩20編を、テーマごとに4つに分類して展示しています。

1 家族を思うねがい

体の弱かった真民の40代の詩は、三人の娘たちが大きくなるまで、とても生きておれないだろうとの思いで書かれています。
三人の娘たちへの思いを詠った詩は、とても切なく、純粹に娘たちの成長を願う詩です。

幼き者へ
 わたしのおうなを
 父として生まれ
 父と呼んでくれ
 三人の子よ
 体の弱いわたしから
 いつまでも「結」に
 生きこゆことほごまかに
 望しい時や
 悲しい事があるなら
 わたしの名を呼んでくれ
 どんなに遠く処にいても
 力になろう
 三人仲良く大きくな
 かみさんと大事にして
 いくんよ

「幼き者へ」

三人の子に
 美しい木になれ
 美しい花になれ
 美しい実になれ

「三人の子に」

2 人々の幸せと平和をねがい

真民のねがいの中心にあるものは、「生きとし生けるものの幸せと平和」です。自分の分身である「たんぽぽ」へ、いつでも声をかけて欲しいと「願う」、真民の想いが詠われた詩です。
下の「ねがい」は、エミリー・ディキンソンの詩に触発されて書かれた、純粹な人間としての生き方を詠った「ねがい」の詩です。

ねがい
 タンポポが
 路のべに
 咲いていましゅう
 こんにはは
 しんみんさんと
 こえをかけて下さいませ
 その「こえが」
 あなたとわたしとを
 結ぶかけ
 どんちんちん遊んで
 あちちの幸せを
 お守りいたします

「ねがい」

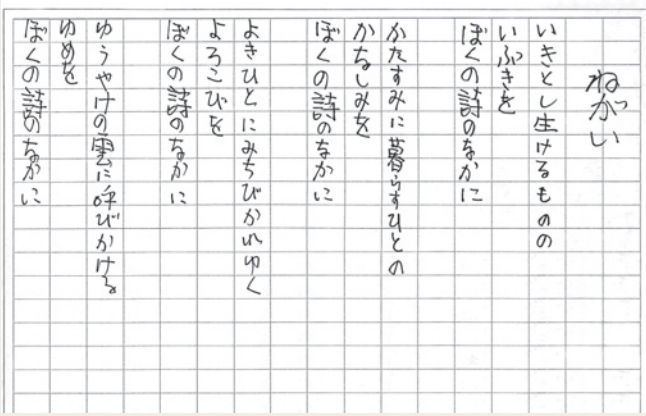
ねがい
 一羽の鳥を
 救い得ば
 一匹の羊を
 救い得ば
 一人の人も
 救い得ば

「ねがい」

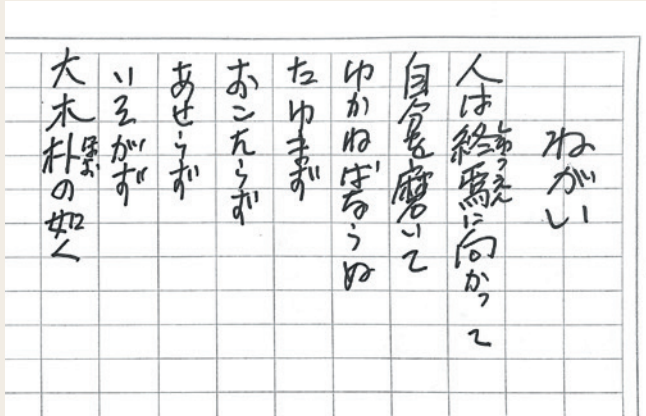
3

詩願成就と生きるためのねがい

「詩願」とは、「二人でも、自分の詩を読んで下さる方が、生きる希望を持って下さること」と「そういう詩を書ける詩人になりたい」とことです。また、真民は人間としてどう生きるのかを、自分自身に問いかけ、そのためにどう生きてゆけばいいのかを詠った詩があります。



「ねがい」

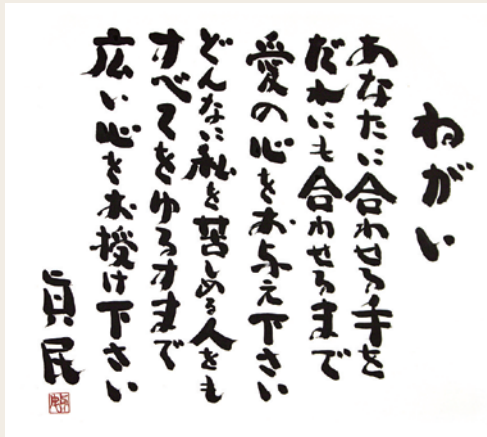


「ねがい」

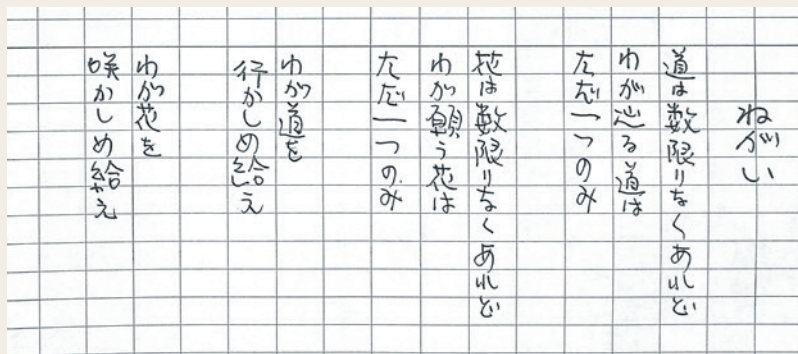
4

仏・神・大いなる人へのねがい

真民がいつも自問自答する中で、厳しく戒め、叱咤激励してくれる、仏と神と大いなる人への、真民が祈る「ねがい」の詩です。



「ねがい」



「ねがい」

坂村真民とタンポポとウクライナ

1. 坂村真民とタンポポ

タンポポは、人に踏まれたり、鳥に食いちぎられたりしても、大地にしつかりと根を張り、へこたれることなく、花を咲かせています。

真民は、そういう「タンポポの生き方」に魅せられ、小さい時から「辛い苦しいことを乗り越えてきた」自分とタンポポを重ねて、タンポポの生き方をめざして、生きるようになりました。

毎日の日記も「タンポポ日記」、「タンポポ堂日記」という題名にしたり、自分の家もタンポポ堂と名付けていました。

タンポポのように(68〜70歳)

わたしはタンポポの根のように
強くになりたいと思いました

タンポポは

踏みにじられても

食いちぎられても

泣きごとや弱音や

ぐちは言いません

却つてぐんぐん根を

大地におろしてゆくのです

わたしはタンポポのように
明るく生きたいと思いました
太陽の光をいっぱい吸い取つて
道べに咲いている

この野草の花をじつと見ていると

どんなに辛いことがあっても

どんなに苦しいことがあっても

リンリンとした勇気が

体のなかに満ち溢れてくるのです

わたしはタンポポの種のように

どんな遠い処へも飛んでいつて

その花言葉のように

幸せをまき散らしたいのです

この花の心をわたしの願いとして

一筋に生きてゆきたいのです

2. 坂村真民とウクライナ

真民はタンポポのことを色々調べている中で、タンポポの学名が「タラクサカム」だということを見つけて、この中に「サカムラ」という言葉が入っていることに感動して、次の詩を書きました。

タラクサカムの花

(真民50歳〜1959年)

たんばばのことを学名タラクサカムという。
この六字の中にサカムラの四字が入っている
不思議を思う。

(前略)

日に何度わたしは
ウクライナの地図を出して見ることだろう
タラクサカムの大草原がいつも
現実のように浮かんでくるのは
一体どうしてだろう

それはわたしの愛する詩人
タラスグリゴロヴィチ・シェフチェンコが
忘れないからであるうか
(あああの盲目の詩人ワシリー・エロシエンコも
ウクライナ生まれだったんだ)

早く父を亡くし

貧乏で育つたことが

わたしの辿った姿と

あまりにも似ているからであろうか
夜明けを仰望し

苦難と戦ってきた

彼の生涯とその作品とが今にいたるまで

わたしの心をとらえて

やまないからであろうか

わたしは彼の詩を誦し

いつも夜明けの雲に呼びかけてきた

ウクライナのキエフの街に鳴りわたる

寺院のさわやかな鐘のひびきよ

ドニエプル河のゆたかな流れよ

日に何度わたしは

ウクライナの地図を出して見ることだろう

わたしの庭のタラクサカムの花も

春の風に舞いのぼつてゆく

憧れのウクライナへと

(後略)

ここに出てくるシェフチェンコは、現在ウクライナで一番愛されている詩人で、帝政ロシアの時代に、農奴の身分でありながら、皇帝に抵抗し、二度も監獄に入れられ、流刑地で詩を書き続けた詩人です。

真民が65年前に、シェフチェンコの反骨、抵抗の詩をこよなく愛すとともに、ウクライナへの思いを詩に書いていたことがわかり、感動しました。

坂村真民記念館を応援しています



『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曾木材産業株式会社

〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫

TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 <http://www.nagiso.co.jp> メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院



介護付有料老人ホーム
To-be

全78居室/20㎡~24㎡(1F&2F)



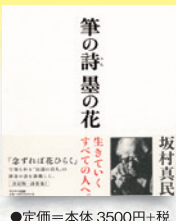
住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部

全18居室/40㎡~90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院西隣) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

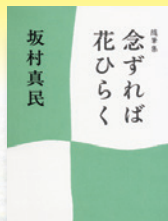
詩墨集
筆の詩墨の花



●定価=本体 3500円+税

坂村真民記念館
所蔵の作品を満載!

随筆集
念ずれば花ひらく



●定価=本体 1800円+税

初めての
随筆集を復刻!

念ずれば花ひらく



10万部突破の
超ロングセラー!

いま届けたい、生き方の道しるべ



詩集 ●定価=本体各1000円+税



詩集 二度とない人生だから

サンマーク出版

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
<http://www.sunmark.co.jp>

広告募集中

「タンポポだより」に広告を出してくださる
企業・団体等を募集しています。

[広告料]

1枠(タテ60mm×ヨコ170mm) …… 年間10万円

- 年間発行部数/2,000部(年4回発行)
- 送付先/友の会会員、県内社会教育施設、県内旅行・観光業者等その他、記念館の来館者に配布

「タンポポだより」の発行費用は、この広告料で賄っています。それによって、友の会の会員の皆様からの会費は、タンポポだよりの送付料や記念館の活動経費に充てることが出来ます。記念館の活動を充実させるためにも、広告料収入が必要不可欠です。どうぞ、このような趣旨をご理解くださり、広告掲載へのご協力をお願いします。



月刊誌「致知」
有名無名やジャンルを問わず、
各界各分野で一道を
切り開いてこられた方々の
貴重な体験談を
毎号紹介しています。

書店では手に入らないながらも、
口コミで増え続け、
11万人に定期購読されている
日本で唯一の
人間学を学ぶ月刊誌です

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-24-9
TEL.03 (3796) 2111 (平日9:00~17:30) FAX.03 (3796) 2108

致知 検索

坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人、 観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧ください [坂村真民記念館 友の会](#)

〔編集後記〕

真民は新しく本が出版されると、その“扉書き”の言葉を楽しみに考えていました。“扉書き”とは、本の表紙を開いたところにする真民のサインの事です。坂村真民全詩集第三巻のそれは、「願に生きる」です。願いを持つという事は、小さな灯とも光ともなるのではないのでしょうか。寒い季節、心は“ほっこり”していたいものです。(真美子)

タンポポだより vol.47 冬号

令和5年12月1日発行

発行元/坂村真民記念館友の会事務局

〒791-2132 伊予郡砥部町大南705 坂村真民記念館内
TEL089-969-3643 FAX089-969-3644

〔坂村真民記念館〕

開館時間/9~17時(入館は16時30分まで)

休館日/月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、12月29日~1月1日

入館料/65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、
小・中学生200円 ※15人以上の団体は割引あり